

時代を読み解く

シリーズ 53

「出来事中心」に

依拠した評価軸

今月の講師

金子 伶斗氏

防衛研究所 先進領域研究部
サイバー安全保障研究室

1994（平成6年）年生まれ、ロンドン出身。法政大学グローバル教養学部卒業、ロンドン大学大学院キングス・カレッジ修士課程修了（戦争学修士）。2016年～25年（社）共同通信社記者、25年防衛研究所入所。専門分野は、戦争学、サイバー・認知領域の安全保障、抑止論。最近の業績として、「サイバー時代の抑止は何か変わったのか—伝統的理論の限界と新たな抑止の考え方」（NIDSコメンタリー、26年3月）

起きたか否か」という出来と整合しにくい。

事中心の評価軸に依拠して象徴的なのが、米国および同盟国の重要インフラに

成立要件とされる能力、信頼性、伝達は、明確な戦争と平和の境界と明示的なシ

グナルを伝える前提によ

に破壊を伴う活動ではない

見せたサイバー抑止論を

の意思決定に摩擦を生み出

散的に展開される敵対行為

非物理的攻勢を実施し、相

対心を打ち込み、認知上の

再計算を相手に迫る区切り

のある抑止という論理もあ

る。いずれも、抑止を一回

限りの威嚇ではなく、時間

を通じて効果を積み上げる

動態的なプロセスとして捉

え直す試みである。

さらに重要なのは、サイ

バー単独では抑止が完結し

されてきたとされる。すな

わち、平時の沈黙の背後で、

有事を見据えた足場の構築

が進行していたのである。

攻勢が物理空間の通常戦力

など統一的に運用され、

情報システム等を介して敵

まえ、一度は行き詰まりを

見せたサイバー抑止論を

の意思決定に摩擦を生み出

散的に展開される敵対行為

非物理的攻勢を実施し、相

対心を打ち込み、認知上の

再計算を相手に迫る区切り

のある抑止という論理もあ

る。いずれも、抑止を一回

限りの威嚇ではなく、時間

を通じて効果を積み上げる

動態的なプロセスとして捉

力といった複数領域の手段

と統合運用されてはじめて

て、相手の行動変容を促す。

2026年2月に実施され

た対イラン「エピック・フュ

ーリー作戦」では、サイバー

軍と宇宙軍が打撃に先立つ

非物理的攻勢を実施し、相

手の状況把握と対応能力を

妨害・低下させようという通

常戦力が目標を打撃したと

米軍が公表しており、領域

域との統合運用を前提とし

てはじめて意味を持つ。重

要なのは、攻撃の絶対的

発ではなく、相手の作戦遂

行に持続的な摩擦を生み、

その軍事目的の達成可能性

を多層的に削り取っていく

累積的・統一的

発想が不可欠に

この理論的潮流は我が国

にも無関係ではない。問わ

れるべきは、いかなる相手

の、いかなる行動を、どの

期間で変容させようとする

のか、という戦略目的の定

義である。サイバーは他領

域との統合運用を前提とし

てはじめて意味を持つ。重

要なのは、攻撃の絶対的

発ではなく、相手の作戦遂

行に持続的な摩擦を生み、

その軍事目的の達成可能性

を多層的に削り取っていく

ことである。サイバー時代

の抑止には、こうした累積

的・統一的な発想が不可欠

て成立するものであった。

がゆえに、出来事中心の発

生するものではない。

「攻撃ゼロ」ではなく相手の行動

の規模・頻度・態様の変容

は、その効果は

すのである。

さらに重要なのは、サイ

バー単独では抑止が完結し

ないという領域横断型抑止

の考え方である。サイバー

のなかで効果が計られるこ

とみなし、抑止理論からの

近年では、イスラエルの

効果の積み上げる

動的プロセスを

効果の積み上げる

動的プロセスを

効果の積み上げる

「攻撃ゼロ」を超えた評価軸へ

サイバー時代の抑止を再考する

「出来事中心」に

依拠した評価軸

国家間競争がサイバー空

間へと深く浸透し、武力行

使に至らないサイバー活動

が常態化する中、伝統的な

抑止理論をサイバー空間に

応用する試みは根底から問

い直されつつある。サイバ

ー攻撃が日常化する今日、

「抑止」という古典的概念

はなお有効なのか。従来の

抑止理論は、核抑止時代に

確立された「重大な攻撃が

指標とする枠組みは、現実

響を及ぼすために事前配置

とみなし、抑止理論からの